

中学生国際交流研修団研修報告会

平成28年2月7日(日) 10:30～ 於: ロマン高原かよう総合会館

発表者: 岡山県立岡山朝日高等学校教諭 白髭 克浩

◆自己紹介と講話の趣旨 ～海外の交流体験をどう生かすか～

私は現在母校で国語教員をしています。岡山朝日高校の前身が岡山中学ということもあり、先輩にあたる岡崎嘉平太の志は、講演会という形で当記念館の協力をいただき、後輩の生徒たちに受け継がせようとしています。

私は1991年から1993年までの2年間、中国派遣日本語教師として黒竜江省ハルピン市にある黒竜江大学で中国人の大学生を相手に2年間教えたことがあります。今日はその経験を基に、「海外での交流体験をどう生かすか」ということについて自分なりの考えを述べてみたいと思います。

まず大切なことは「体験を語り継ぐ」ということです。自らが体験し、気づいたことを語ることで、他の人が「自分ならどうするだろうか」と考えるきっかけになります。

次に「自らのできることで世の中に貢献する」ということです。自らの体験は自分でしたわけですが、その立場やその資格を与えてくれた人の存在があるはずで、その人たちに感謝しながら、自分のできることで長く働きかけることが必要ではないでしょうか。そうすることで自分が体験したことが、人の心に、世の中に生きていきます。

◆体験を語り継ぐ① ～祖母の中国体験から～

中国派遣日本語教師の派遣期間が長期であることから、祖母の許に暇乞いに行きました。勤務地の不安を漏らしましたところ、祖母から「大丈夫、心配ないから」と言われました。老婆の根拠のない慰めと思っていたところ、終戦の混乱期に実は私の派遣地と同じハルピンにいたことを初めて明かされました。

今から72年前の1944年。終戦の1年前に満洲帝国、現在の中国東北部のハルピンに、祖母は病院の看護婦として赴任していました。我が子を日本に残しての単身赴任でしたから、日本の負け戦は時間の問題となったころです。祖母は毎朝、お抱えの人力車で出勤し、勤務が終われば宿舎まで送って貰っていたそうです。馴染みになった車夫に日本に残した子どもの写真を見せていたそうです。

終戦1年前の冬の夜。宿舎のドアを激しくたたいた音がしました。開けてみると、そこにはいつもの人力車の男が立っていました。片言の日本語と身振りで、男の妻がにわかに産気づき、看護婦の祖母に子どもを取りあげてほしいと頼んでいることが判りました。助産師の資格もある祖母は躊躇なく、男と夜の雪道を急いだそうです。男の家に行ったところ、薄ら寒い家には家具らしい家具はほとんどなく、厳しい生活が伺えたそうです。そこで、湯を沸かし、玉のような男の子を無事取りあげました。父になった男は額を祖母の手に押しつけ、何度も礼を言ったそうです。

それから1年後、1945年8月。広島に原爆が落とされ、日本の敗戦が現実のものになったころ、勤めていた病院では総員退避が告げられました。自決用の青酸カリ入りカプセルを一つ渡され、各々が運を天に任せて落ち延びるというものでした。頼みにしていた100万の関東軍もこのころにはなく、幹部将校たちは130万の在留日本人を置き去りにして、いち早く撤退していたというではありませんか。

日本軍の敗走を聞きつけて、暴徒は日本人商店や交番を襲撃し、市街地の至るところで火の手が上がり、凄惨な報復劇が始まっていました。民族の尊厳と自由を奪われたことへの恨みが、「日本人狩り」という形になって市内を呑み込んでいました。

女一人がどうやってこのハルピンから日本に帰れるのか。どうすることもできない恐ろしい現実を前に、渡されたカプセルを噛み砕こうかという、卑怯な考えも過ぎたそうです。しかし、日本に残した我が子を思えば、なんとしても生きて帰りたいという気持ちが強くなり、衝き上げてきました。どうすることもできず、官舎の一室で途方に暮れていると、ドアを激しく叩く音がしました。(ああ、ここにも暴徒が来たのかと思って)身を固くしていたところ、聞き覚えのある男の声でした。恐る恐る開けてみると、そこには二人の若者を従えて、あの車曳きの男が立っていました。

片言の日本語、片言の中国語、後は身振り手振り、そして何よりも相手の熱い眼差し。駅まで逃すということを、男が言っていることが解りました。荷物一つを手にし、案内されるままに人力車に乗り込む。幌を深く下げ、乗っている祖母の顔が見えないようにしてから走り出す。前後を子分に空の人力車を曳かせ、人を近づけないようにハルピン駅頭を目指す。途中で、何度か侵攻してきたソ連兵に声をかけられたこともありましたが、男たちは黒い旋風のように、振り返りもせず、駆け抜けて行きました。辻辻に設けられた日本人狩りの検問所を突破するのですから、場合によっては後ろから軽機関銃で撃たれる危険もあります。

逃げる祖母も命がけなら、逃がす男たちも命がけの逃避行。

伊藤博文が暗殺されたハルピン駅は、避難民でごった返していたそうです。人の波をかき分け、かき分け男に手を引かれるまま大連行きの客車に乗り込む。男は荷物を持ったまま座席の傍らから離れない。出発するまでは離れないつもりでいるのが分かりました。出発の時刻になったその時に、けたたましい汽笛の音がしたのです。「日本人はいないか」という大声が聞こえ、暴徒はついにホームにまで雪崩れ込んできました。角材や鉄パイプを手にした男たちが、一輛一輛、捜しているのです。見つかった日本人は引きずり出されひどい目に遭わされていたそうです。

男は身を被せるようにして祖母を隠し、二人の子分には車輛の前後の入り口に張り付けさせ、暴徒が車内に入っていないようにしていました。長い、長い憎悪に満ちた嵐は過ぎ去り、やっと汽車が出るようになって、男は、座っている祖母の膝と自分の膝とをトントンとあわせるように別れの挨拶をして去って行きました。言葉をかければ、それに応える祖母の声から日本人と気づかれる恐れがあります。周到な心遣いです。

この体験談で、一人の人間として、他者を敬い、最後まで諦めるなどということを祖母は言いたかったのでしょう。外国との交流では言葉が話せるということは確かに重要ですが、**極限の状況では、言葉よりも、人としての信義です。信義を貫けば、たとえ敵対することになったとしても、命を懸けて報いようとする人がいるということです。**

このことは難航を極めた日中国交正常化交渉が岡崎嘉平太と周恩来総理の二人の信義によって、道が開かれたことでもわかります。

しかし、当時信義を貫けば誰でもが生きられたかという、戦時下ではそうはいかず、無念の死を遂げ、異国の土になった人も多いと聞きます。

◆体験を語り継ぐ② ～自らの中国体験から～

(スライド1) 着任当初、果物を買ってくれなかったおばさん。

(スライド2) 春天来了！春よ、よくぞ来た！

(スライド3) 拷問台と周恩来総理の談話。

(スライド4) 「人の身になって考えよう」「前事不忘，後事之師」という視点が必要。

(スライド5) 恐怖の冬

(スライド6) 学生との生活①味噌汁の味はどんな味？

(スライド7) 学生との生活②「さくら」ってどんな花？

(スライド8) 第2の故郷，ハルピンとの別れ。

(スライド9) 故郷に感謝，世界に思いを。人材育成の大切さ。

中国派遣の2年間は、生活習慣が違い、歴史認識が違う彼の地にあっても、困ることはありませんでした。祖母が一生懸命に生きたように、私も一生懸命に生きましたから。その指針になったのは、「己の欲せざる所は、人に施すこと勿かれ」という『論語』の教えですが、**岡崎嘉平太の「人の身になって考えよう」という言葉に通じる考えです。**

2年間の中国勤務を終えて、海外で人との交流ができたことは有意義でした。

- ◆一つは、自分の限界に挑戦している若者と多く出会えたから。
- ◆もう一つは、信頼できる人間がいることを身をもって知ったから。

自分の限界に挑戦していた若者を一人紹介します。S君という中国人学生です。

黒竜江大学でも『羅生門』を教えたことがありました。本読みが少々力不足であったため、後日宿舎に読みに来るように指示したところ、一日経っても、二日経ってもやってこない。三日目にして私は、「S君、本読みにいつ来るのかね？」と聞いたところ、S君は、「分かりました。先生、今夜伺います」と。宿舎で待っていると、S君は教科書も持たずにやって来た。私はどんな言い訳をするのだろうかと思ちかまえていました。下手ないい訳をしようものなら、とちめてやろうと思っていたところ、「先生、では始めます」と、『羅生門』の全文の暗唱を始めたのです。

一字一句、句読点の位置に至るまで読み違えず、暗唱するS君に、言い訳をするだろうと思込んでいた私は恥ずかしく、顔の火照りを感じていました。

中国人の大学生にとって、短編とは言え、外国語である『羅生門』の全文を暗唱することは、並大抵の努力では無かったはずです。(高校時代の私はどれだけの努力で、数学や物理ができないと言っていたのでしょうか。)

後日、S君に「どうしてそれほどまでに努力するのか」理由を聞いたところ、彼らの、大学生という境遇は、自分一人だけのものではないということでした。つまりは、「**自分のためだけではなく、自分たちを支えてくれた村や国家のためにも頑張る**」ということでした。S君をはじめ大学に通っている学生は貧しく、国立大学とは言え、日々の生活や教材にはお金が掛かります。それらの費用を賄える家庭は希で、志のある優秀な人材については、村人たちがお金を出し合い、進学させているというではありませんか。だから、彼らは絶えず自分たちが多くの人から支えられているということを励みにしています。**将来の夢を問えば、どの学生の夢にも、国家の発展と、地域社会が少しでも暮らし良くなっていくために尽力したいという、社会のために尽くしている自己像というものがありました。「何のために学ぶのか」という問いかけに、「お世話になった地域や社会に貢献する」という思いは失ってはならないと考えます。**

あれから20年あまり、今の中国の発展を第一線で支えているのは、そんな努力をしてきた彼らの世代なのです。

国と国が角を突き合わせ、膠着してもそれを動かすのは人間です。

2年前、中国に反日の嵐が吹き荒れて、中国に進出した百貨店が打ち壊され、自動車工場が火に包まれた光景を、テレビで連日のように見ていました。

しかし、その中国には、日本についてフェアに語れる私の教え子が大学で教鞭をとっています。日中友好の志を持った私の教え子が母親となり、我が子にも将来、日本と中国の友好の架け橋になってほしいと一生懸命子育てをしていることも知っています。ですから、国同士がギクシャクしても、その向こうに信頼する教え子が、人間がいることを知っているのです、私の心は決して揺れることはありません。実際の交流を通じて信頼に足る人間がそこにいると言うことを肌で知っていれば、その頭上に爆弾を落とし合うという発想には決してならないはずです。

日中が困難な状況に陥った今こそ、岡崎嘉平太と周恩来総理の二人の信義によって、難航を極めた日中国交正常化交渉の道が開かれたことに思いを馳せる必要があります。

◆自らできることで世の中に貢献する ～教職という立場からの日中友好～

国同士がいがみ合い、ギクシャクしてもその向こうには、自分たちと何ら変わらない人間がいて、その営みがあります。人間平等、万国友好などとは頭ではわかっている、そのことを肌で、感情として自然に持つことが何より大切です。そのために岡崎嘉平太が生前100回もの訪中を果たし、その折りにまだ中国を訪れたことのない日本人を多く同行させたと聞きます。「ああ、ともに同じ人間だ」ということを感じさせたかったからと聞いています。

私は一教員として何ができるのか。生徒に自らの体験を語り継ぐことと、自分ができることで働きかけていきたいと考えています。それは何か。子どもたちに「学ぶことの意義を伝えていくことだ」と考えています。

西洋には「Mastery For Service（熟練は奉仕のために）」という発想がそうであり、東洋では中国の古典、四書五経の中の『大学』という書物にも見られる「修己治人」の発想がそれに当たると考えます。「修己治人」とは「己を修めて、多くの人のために尽くす」という意味にとって良いでしょう。

「何のために学ぶのか」という問いかけに、「お世話になった地域や社会に貢献する」という視点は失ってはならないと考えています。

岡崎の言葉に「放眼世界、懐胸祖国」というものがありますが、学ぶ意義もそのような幅広い視野と郷土への感謝の気持ちと離れては存在しないはずで

す。それは日々の授業をどう考えるかが問われています。目先の受験だけにとらわれることなく、これからの日本、世界に通じる人材を育てているという視点を絶えず持ち続けることが何より大切だと考えています。教師自らにその展望がないのに、教わる子どもたちが「世界のために役立つ己をつくる」という気概を持つことはできないでしょう。

朝日高校は「普通科」です。もともと「普通」とは「普く（世の中に）通ずる」学びをすることです。まるで「武者修行」のように広く様々なことを学ぶ姿勢は脈々と伝わっています。多くを学ぶことで世の中で困っている人の力になれるはずで

す。かつて岡崎嘉平太は朝日高校の創立記念式典で「立派な人」という題名で講演をされたことがあります。岡崎が示した「立派な人」とは、「功成り名を遂げ、何かを成し遂げた人物」を指すのではなく、「世の中が少しでも良くなるようにと努力している人」を言い、さらに「そのような志を持っている人ならば、立派な朝日高校の卒業生、いつでも学校に戻って在校生を励ましてほしい」という趣旨の話がされました。それを聞いていた朝日高生は万雷の拍手で応えたということが伝わっています。

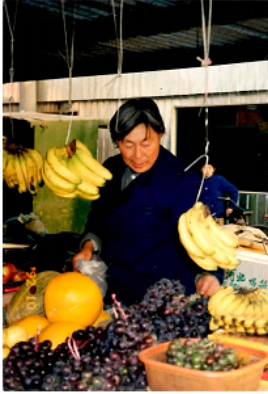
卒業生である私はこの言葉によって生かされ、今、朝日高校で教員をすることができています。私はこの講演を直接はうかがっていませんでしたが、この話を伝えてくださったのも私の先輩でした。感謝しています。

岡崎は「一年の計には穀を植え、十年の計には木をうえ、百年の計には人を樹えよ」という管仲の言葉を引いて、これからの時代を担う人材育成の重要性を指摘しています。その遺志を継いだ人材交流が続いています。今日のこの会もそんな岡崎の遺志を継いだ会であり、この会に招かれた私は教職という立場から、岡崎嘉平太の志を語り、日中友好をはじめ、世界に貢献する人材の育成を支えたいと、決意も新たにしています。

本日は講演の機会を与えてくださり、誠にありがとうございました。

◆体験を語り継ぐ② ～自らの中国体験から～

(スライド1) 着任当初、果物を売ってくれなかったお婆さん。



着任当初、私が日本人という理由で果物を売ってくれなかったお婆さんです。後でわかったことですが、お婆さんは日本軍から散々な目に遭わされたそうです。高くても意地になって、このお婆さんから果物を買うようにしました。

ある日、店に香り高いメロンが出ていました。祖母から聞いていた「哈密瓜（ハミグワ）」でした。買って帰ると、部屋中が良い香りに包まれました。添削指導に来ていた学生がハミグワの香りを嗅ぎつけ、一緒に食べることになったのですが、さらにこの噂を聞きつけて予定にない学生たちも来るようになり、すぐになくなってしまいました。

また買いに来た私にお婆さんは驚いたので、「学生たちと一緒に食べたらなくなったんだ」と言ったところ、お婆さんは「お前は良い男だ。一つおまけしてやるから、この国を担う学生たちに食わせてやってくれ」と言うのです。学生たちにこのことを伝えたところ、学生はお婆さんにお礼を言ってくれました。そのおかげで、私は学校の先生として認められ、その後安く果物を売って貰えるようになりました。

帰国する前日に別れを言いに行った時、お婆さんは私との別れをいつまでも惜しんでくれたのです。

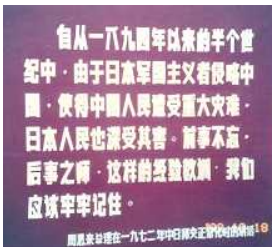
(スライド2) 春天来了！春よ、よくぞ来た！



ハルピンはマイナスになる日は年間200日を超え、厳寒の頃はマイナス30度にまで下がります。オーロラを初めて見ました。肉眼では稲光のように夜空に映りません。また、ダイヤモンドダストと呼ばれる光景も見ました。厳寒の屋外で吐く息は白く見えます。くしゃみをしたところ、自分のくしゃみが3分も飛ぶことが目に見えて判りました。風邪を引いた時には必ずマスクを着用すべきですね。そんな厳しい冬を越えた向こうにある春は、なんとも心地よく、百花繚乱の世界がひろがります。

写真は身の丈以上もあるライラックの林です。フランス語では「リラ」と呼ばれるその花は、甘い香りを放っていました。日本でのサクラを思い出し、淋しくなりました。

(スライド3) 拷問台と周恩来総理の談話。



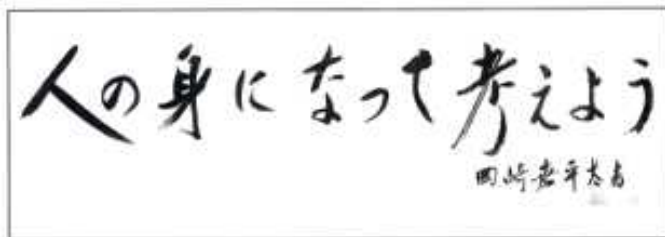
ハルピンは伊藤博文が暗殺された土地であり、森村誠一の『悪魔の飽食』でも有名な、関東軍防疫給水部731部隊があった場所です。反日感情は特に根強いものがあります。

731部隊が使っていた拷問台が今も残っています。台の脚の部分に刻印があります。ベッドにベルトで括り付け、枡の中に頭を入れ、その上から唐辛子入りの熱湯を掛けたり、踏みつけたりして、抗日分子を自白させるという、聞くも恐ろしい拷問台です。

その展示記念館の入口に、1972年に周恩来が述べた日中国交正常化の談話があります。「日本軍国主義者は中国と中国人民に甚大な被害を与えたが、日本人民もまたその損害を被っている。この戦禍の記憶を忘れず、後世の教えとするべきだ」という内容です。

この拷問台を見れば、中国人を当時どのように扱ったかがわかります。参観者は誰も日本に対して憎悪を募らせるはずですが、憎らしい日本ではありますが、日本国民も被害者とする内容には中国人民を日中友好に導く、周恩来の政治家としての論理が見て取れます。日本人はこの談話に救われる思いがします。しかし、中国大陸で何をしたのかを、決して忘れてはならないと考えています。

(スライド4)「人の身になって考えよう」「前事不忘，後事之師」という視点が必要。



中国派遣の2年間は、生活習慣が違い、歴史認識が違う彼の地にあっても、困ることはありませんでした。生き方の指針になったのが、「己の欲せざる所は、人に施すこと勿かれ」という『論語』の考えですが、岡崎嘉平太の「人の身

になって考えよう」という言葉につながるものです。

海外に出る時には自国の歴史をよく学んでおく必要があります。過去は消し去ることはできません。現代の私にできることは、悲しい過去に深い哀悼を捧げ、未来を切り拓いてゆくことだと考えます。私は731部隊の記念館の職員が説明する中国語を聞き取り、学生たちにアルバイトとして翻訳させました。どのように説明しているのかを知ろうとしたのです。日本にとって、聞き触りが良いことも、不利なことも、両方聞かなければ、本当の意味での理解にはつながりません。(もっとも「本当の理解」というものが存在するのか、懐疑的ではありますが。)

老子に「天下の王は、国の恥辱、世の中の不祥を全て引き受けてはじめて、王と言える」という教えがあります。苦言、苦情から逃げれば、逃げるほどどこまでも追ってきます。向き合う覚悟を持ってこそ、人から信頼される人間になれると考えます。

(スライド5) 恐怖の冬



市内を流れる「松花江（ロシア名「スングアリー」）」は、河幅3キロはある大河です。冬場は全面結氷します。河が道路に変身するのですが、凍り初めは、割れ目に転落する事故もあり、毎年のように何人

かは命を落としています。氷の厚さは3尺にもなり、切り出して「氷り祭」に使います。

写真は氷が切り出された河のプールです。ですから、泳いでいるところは、ゆっくりとした流れがあります。寒中水泳の人が凍えて氷の下に入ってしまったら、大変です。来年の春までは上がってこないことになります。春になると、河の氷が溶け出します。溶け出した氷の塊が鉄道や道路の橋梁にぶつからないように、人民解放軍がダイナマイトで発破をします。この発破の音が鳴り響くと春の到来が感じられます。

(スライド6) 学生との生活①味噌汁の味はどんな味？



学生の生活は貧しく、ちょっと週末に居酒屋で一杯ということにはなりません。日本語を学ぶ学生は日本食を知りません。味噌汁の味も知らないのです。知ったからと言って、日本語がうまくなるわけでもありませんが、何だか味気ない気がしましたので、学生たちと日本食を作って食べました。

すき焼き、牛丼、シチュー、ちらし寿司、カレーなどを学生たちと作って食べました。

学習の班競争を1週間単位でし、その表彰時に一緒に日本食を作りました。1位の班は王様気分で食べるだけですが、2位は一緒に作り、3位は町に買い出し、4位、5位は食材を洗うことを課しました。冷たい水で食材を洗うことに、学生たちは恐怖しました。2位の学生が全員で食べる前に日本語で調理法を説明します。

(スライド7) 学生との生活②「さくら」ってどんな花？



学生に「サクラ吹雪」を体験させるために色紙で紙袋いっぱいには花びらを切って作り、学生の頭上にまき散らしましたが、理解は今一つだったようです。ただ、「日本人がそこまでしても伝えたい花」という認識は持ってくれたようでした。日本のことについて教えてみて、日本人の当たり前を教えることが、如何に難しいことかに気付かされました。日本でのありふれた日々の生活を説明することで、自分自身の「日本理解」が試される思いがしました。

学生たちは、訪日したら世界最高水準の技術を結集した、高速で安全で快適な新幹線に乗ってみたいと口々に言い合っていました。しかし、そこに乗っている日本人はどうでしょうか。妊婦やお年寄りに席を譲らず、騒ぐ子どももたしなめない車内の有様を見たら、さぞかしガッカリするでしょうね。

(スライド8) 第2の故郷、ハルピンとの別れ。



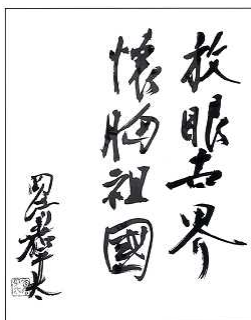
最後の講義では、学生たちにリーダーとして日本の理解にこれからも努めてほしいことを述べました。

帰国の朝は、校園は名残の新雪に包まれ、空は晴れ渡っていました。学生から、「先生は別れが悲しくないのですか」と問われましたが、在任中、考え得る全てに全力を注ぎましたので、悔いは一つなく、晴れやかな空と同じ思いでした。

休暇中にも関わらず、多くの学生が見送りに集まってくれました。ロシア人教師や韓国人留学生たちとも別れを惜しみました。

冬のハルピンはとても寒く、大地は荒涼としていましたが、人々は決して凍り付くことのない情熱を持っていました。ハルピンはいつの間にか心の故郷になっていました。

(スライド9) 故郷に感謝，世界に思いを。人材育成の大切さ。



岡崎の言葉に「放眼世界，懐胸祖国」というものがありますが，学ぶ意義もそのような幅広い視野と郷土への感謝の気持ちと離れては存在しないはずです。

また岡崎は「一年の計には穀を植え，十年の計には木をうえ，百年の計には人を樹えよ」という管仲の言葉を引いて，次世代を担う人材育成の重要性を指摘しています。

それは私自身が日々の授業をどう考えるかが問われているように思います。目先の受験だけにとらわれることなく，これからの日本，世界に通じる人材を育てているという視点を絶えず持ち続けることが何より大切だと考えています。教師自らにその展望がないのに，子どもたちが「世界のために役立つ己をつくる」という気概を持つことはできないはずです。

(スライド10) 余話として，M君との20年ぶりの再会。



89級における「我的学生」のM君が20年ぶりに訪ねてくれました。長い時間を越えてわざわざ来てくれる有り難さ。感謝！日中の困難な時代だからこそ，日中国交正常化の原点とも言える，朝日高校（岡山中学後身）と岡崎嘉平太記念館を一緒に訪問しました。